

## 50 報化の二土

正信偈には、「報化二土正弁立」

和讃には、報の淨土の往生は

おほからずとぞあらわせる

化土にうまるる衆生は

すくなからずとおしへたり

報土の信者はおほからず

化土の行者はかずおほし

自力の菩提かなわねば

久遠劫より流転せり

こんな明文をどんな読み方をしているのだろうか。自分達は素直に他力不思議の信仰に入

れさせて貰つていると自惚れている為に、化土なんてな事は夢にも考えていないのだ。雑行

も雑修も自力の心も疑いの心も、学問としては知つておらるるかも知れないが、実地となつ

たら自分の実機さえも知らないのだから御氣の毒なものだ。

船に乗れば大海は渡れると知つてもおり、信じてもいるけれども、乗る事を忘れているから渡れないのだ。食物を食べれば飢えは凌げると知つてもおり信じてもおるけれども、食べる事を忘れているから空腹いのだ。着物を着れば寒さを凌げると知つてもおり信じてもおるけれども、着ることを忘れているから震えているのだ。電灯を点ければ明るくなると知つてもおり信じてもおるけれども、点ける事を忘れているから晴れていないので。

真宗の道俗は、合点したのを信仰と思つて素直に聞けくと猫を冠るのを他力の信仰の

ように思つてゐるけれども、自分が邪見嬌慢の惡衆生とも、自分が逆誹の屍とも知らずに、素直な者と自惚れているのだから、幾万劫を過ぎ去つたとて、第十八願の信楽開発まで出れるものかい。そんなに素直に聞く位なら、三世の諸仏が愛想つかされたり、八千遍の御苦勞を要したり、十八願から唯除逆誹と捨てられたり、祖師から難中の難と叱られるも

のかい。

第十八願は絶対の他力不思議でその境地に一朝一夕で入る事が出来ない程自力の機執に閉ざされているから、それを育て上げる為に八万の法藏を説かれ、それを観無量寿經に置み、阿彌陀經に納め、大無量壽經で一体に成そうとさるので、その釈尊は彌陀の誓願の真髓を見究められての説法であるから、觀經の定散二善三福九品は第十九願の修諸功德の開設であり、小經の嫌貶開示の説法は第二十願の植諸德本の開設であり、大經の仏の正覺と衆生の往生とは、第十八願の若不生者不取正覺の念力の開示であるから、八万の法藏も三經の開示も、三願轉入の方便より真実に帰せしめんが為である。

然れば直ちに第十八願に歸入する事が出来ないから第十九、第二十の方便に入れて調熟して、真実に融入しようとするのが一尊の目的である。して見れば真実なる者は少なく、方便の柄にいる者は多い道理である。方便の柄とは、諸善万行の域を離れ切らず、又折角

みょうごう まなこ そそ  
名号に眼を注ぎながら、自力の機執の去らない人が多いから、これを領解文には雜行雜修  
と言われ、自力の心とか疑いの心とも教えられて、捨つべき物を指摘して下さつてあるけれども、自分がその域に迷没している事を知らないのだから、自分は専修の行者と思ひながら一向専修の他人は殆どいないのだ。原因が開発していないのだから結果の報土が顯るる筈がないのだ。

ほう  
報の淨土の往生は

おほからずとあらはせる

けど  
化土にうまるる衆生は

すくなからずとおしへたり

じっさい  
實際、報土往生する人は多くなく、化土に生るる衆生は少なくないのだ。

ほうど  
報土の信者はおほからず

けど  
化土の行者はかずおほし

じりき  
自力の菩提かなわねば

くおんごう  
久遠劫より流転せり

と、専修の行者が多くないから報土往生の人が殆どなく、雑修の行者ばかりだから化土に生る人ばかりだ、と明らかに出ているではないか。自力の菩提とは定散自力の心を指しているのだから、その機執を離れ切らないうから流転の絆を截つ事が出来ないのだと厳しいご意見である。

道俗よ!! 化土は自力で行くのだから難しい、報土は他力で行くのだから易いという考えは、全然誤りである事を改めなければならないぞ。方便の化土が難しくて報土の真実が易いと言うなら、何を好んで難しい方便を説く必要があるのだ。終極の目的が真実の絶対他力であつて、その極致に到達せしむる方便が第十九、第二十であるから、方便に止まるものが多くの第十八願の極致が少ないので当然ではないか。だのに第十九、第二十は自力だから難しい、第十八は他力だから易いと、他力の言葉に誤魔化されて他力不思議に生かさることを忘れ、名号に向えれば皆第十八願の行者のように心得て、法の尊高を仰げ、成就の本願を聞

け、願行具足、機法一体、死にさえすれば往生と向こうばかり眺めさしているのは、明らかに第二十願の万行超過の相ではないか。いかに法の御手元に成就されてあつても機受の信相がなくて誰が助かるのだ。死後の往生を夢見ているが、それは結果ではないか。原因が開発していないのに五十二段が超証さるる筈がないではないか。真宗の道俗は初めから信後の話を聞いて有難がつてゐるが、話してゐる人も信前にいて信後の真似をさし、聞いている人も信前の入口にいながら信後の積りで聞いてゐるのだから、猿に袴を着せたよりも変なものになつてゐるよ。五十年聞いても七十年聞いても大満足の出来ないのは当然なのだ。自分の心を抜きにして宗教を聞いてゐるのだから開発する筈がないよ。受取る機がお留守に成つてゐるではないか。機法一体に成就された事を聞けと言つてゐるが、成就されたのは十劫の昔で、今の苦惱を今晴らされなくては、信念冥合の機法一体が成就されないではないか。機受の信相がなければ無帰命安心だから、決定心のないのは当然なのだ。決定心の無い者もの

が報土往生が望めるものかい。自力を自力と知らないで、自力を働かしている事を知らないのだ。他力不思議で開発され、水際鮮やかに十方法界を全領するまでは悉く自力の機執が離れてはいないのだ。離れていない人が往生するのは皆化土なのだ。本人は報土往生と自惚れているだろうが、一念抜きの後続の報謝だから淨土真宗ではないのだ。淨土真宗でない者が報土往生が望めるものかい。

一代諸教の信よりも

弘願の信楽なほかたし

難中之難とときたまひ

無過斯難とのべたまふ

真実信心うることは

末法濁世にまれなりと

恒沙の諸仏の証誠に

えがたきほどをあらわせり

罪福ふかく信じつつ

善本修習するひとは

疑心の善人なるゆえに

方便化土にとまるなり

仏智の不思議を疑惑して

罪福信じ善本を

修して淨土をねがふひと

胎生といふとときたまふ